

特集

ネギ黒腐菌核病の防除体系構築に向けた取り組み ネギ黒腐菌核病の発生実態と防除対策

茨城県農業総合センター園芸研究所 おがわら たか し 小河原 孝 司

はじめに

日本国内におけるネギ黒腐菌核病（病原菌：*Sclerotium cepivorum* Berkeley）の発生は、昭和32年に栃木県で初確認され、時をほぼ同じくして千葉県や埼玉県で発生を認め、その後、関東地方にまん延したと報告されている（若井田，1965）。同文献によれば、当時は地床育苗時に多発生し、5月ごろ、本圃に定植するための苗が不足して、苗数確保のためには苗床面積を数倍に増やす必要があったとされている。このことから若井田（1965）は苗床における防除法の検討を行い、播種前の土壌くん蒸剤処理と播種後の化学農薬の土壌灌注処理による「ダブル消毒」が有効であると報告している。その後、ネギの栽培方法は変化し、近年のネギ栽培では、セルトレイやチェーンポット等によるハウス内育苗が多くなり、苗床で黒腐菌核病が問題となることは少なくなった。

しかし、その一方で、近年、本圃における本病の発生が急速に拡大し、一度多発生した圃場では、防除が困難となるため、効果的な防除法の確立が求められてきた。

本稿では、近年のネギ黒腐菌核病の発生実態とこれまでに当県を含む全国の試験研究機関や民間企業が取り組んできた各種防除対策の結果についてまとめた。

I ネギ黒腐菌核病の発生実態

1 茨城県での発生状況

茨城県では、夏ネギ（7～8月収穫）と秋冬ネギ（主として年内の10～12月収穫）を中心に栽培されてきたが、近年は、マルチ、トンネル、べたがけ資材などの保温資材を用いて栽培する初夏ネギ（4～6月収穫、農林水産統計上は春ネギに分類）が増加している（図-1、図-2）。黒腐菌核病は、春ネギ（1～3月収穫）や近年栽培面積が増加している初夏ネギで多発生し問題となっている。一方、平均気温が上昇し始める2月中下旬以降に定植する夏ネギや秋冬ネギでの発生は少なく、大きな被害は認められていない。

2 国内での発生状況

本病は、関東地方の茨城県、千葉県、埼玉県、群馬県、東海地方の静岡県や中国地方の鳥取県などの根深ネギ産

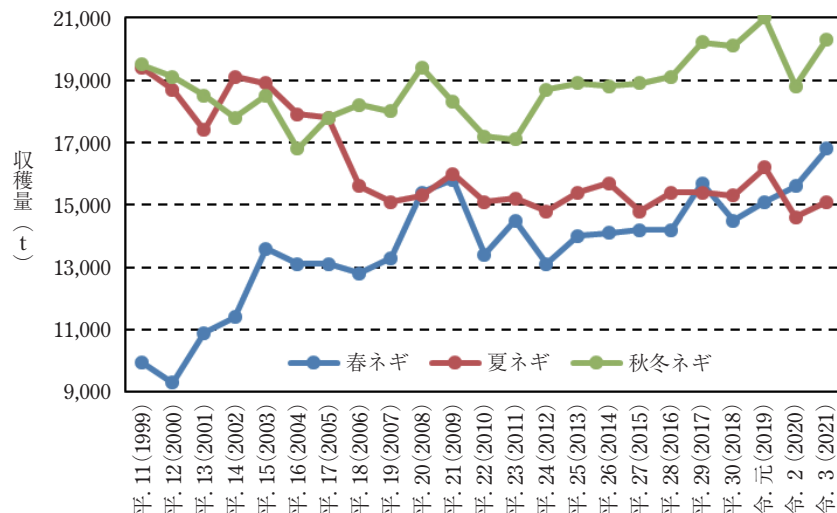


図-1 茨城県における根深ネギの作型別収穫量の推移
(農林水産省野菜生産出荷統計を集計)

Occurrence and Integrated Control of White Rot Disease in Welsh Onion. By Takashi OGAWARA

(キーワード：ネギ，黒腐菌核病，発生実態，防除法)